私の幼児教育論

―つれづれなるままに―

藤永　保

「私の幼児教育論」などと題するのは、気恥ずかしいし気が重い。私は、元来「論」は嫌いである。何をかいたらよいのか、編集者に訊ねたら、何でも結構ですという答が返ってきた。

何でも結構といわれると、かえってとまどう。題目がもう少し具体的に決まっているほうが、かきやすいばあいが多いものだ。自由にというのは、案外難しい。

思うに、これには、いくつかの理由があろう。たとえば、細かい題目を指定されているのであれば、かりに自分は多少不得意だと思っても、向うの決めたことだから仕方がないと諦めもつこう。つまり、一種の責任転嫁ということになるわけだが、ここで大分気が楽になる。

第二は、題目が限定されているほど、直接具体的な連想が働き、発想の段階で苦しまなくてもすむということがある。もとより、これは既製品を小出しにしているというにすぎず、基本的にはほめられたことではないが、テーマ探しの段階から汗をかいて苦しまずにすむというものであろう。

もう一つ、こういうこともあるだろう。題が決まっているということは、暗黙に、どんな読者がどんな興味をもってよむのかあらかじめ想定していることになる。すると、かく側でも具体的なイメージがわくと同時に、どんなしかたで語りかけようかという構えもできる。これも、筆を進めるうえでは大きな助けとなるわけである。

その他、数えあげれば、まだまだ理由はあるのかもしれない。いずれにしろ、自由題というのは、かなりやっかいなことが自他

ともに納得できればよいのである。それは、ゆくえもしらず、旅にでるのに似ている。途上、思いがけない収穫に出あうかもしれないという楽しみもある反面、どんな落し穴が待っているかもしれないのである。いや、思いがけない楽しみすら、ぼんやりしていれば、見れども見えない状態のまま過ぎていってしまうだろう。人まかせの旅とちがって、いつも何がしかの緊張をしいられるわけである。

奇妙な副題をつけたけれども、別にふざけているわけではない。いわば、テーマはあらかじめ決めずに、筆のおもむくまま、しばらく気ままな旅にでてみようということにほかならない。

◇自由保育の金字塔◇

気ままな旅だから、ここでのべるのは、みな一種の思いつきである。ふと思いついてあそこを訪ね、また感興に誘われてかしこにおもむき、という具合に行けたら最上であろうか。

自由題でかくのは難しいということから、連想は、自然に「自由保育」ということばに走っていく。これは、一種の金字塔であるらしいから、その偉容をしばらく眺めてみるのも一興であろう。

自由保育とは、いったい何だろうか。改めて考えてみると、よく分らない自分に気づく。なるほど、ことばというのは誠に便利な符号である。ものの名前を知ると、私たちは、そのもの自体が分ったかのように思いこむ。知っているものの名前が想いだせないといらいらするというのは、誰しも経験するところであろう。故旧忘れうべきとはいうが、久しぶりに会った昔の同級生の名前が想いだせないと、これまたひどく不安定な気持になる。しかし、やっと名前が分ると、それに伴って、昔の顔かたちやふるまいなどが自然にひきだされてくるから、妙というべきであろう。ことばは、認識のための万能の道しるべのようにみえる。

しかし、ここに、実は危険な落し穴も潜んでいるのではなかろうか。名前さえつければ、私たちは、そのとたんに、当の対象はすべて分ってしまったかのように思いこむ。はては、実体は定かでないことばだけが、やみ夜のこうもりのように飛びかうことにもなるのだ。ことばが、プラスの価値づけを伴うとき、この飛翔の幅は特に大きくなる。

「自由を我らに」は、何と甘美な誘惑であろうか。自由保育ともなれば、これはまず最上のものであるにちがいない。ことばの魅惑は、まことに大きいのだ。しかし、さてと改ってみると、その

実体は定かでない。

ふつう、自由保育とは、いっせい保育と対立した意味に使われている。ここからは、一方に、幼児一人一人の進度やペースやひいては発達の段階にのっとって何かが進められるのに対して、他方は、教師主導型のペースでいわば画一的に何かの目標に到達させるというイメージが描かれやすい。前者に軍配が上がる所以である。

しかし、ことは、果してそれほど単純だろうか。どんないっせい保育であっても、個々の幼児のペースを無視しては成立しないのは明らかである。幼児だから自由にというニュアンスも、私には承服しかねる。幼児だけを、どうしてそう特別扱いしたがるのだろう。大学生ですら、いっせい、画一、型にはめるというのであれば、よくよくの合意がなければ、成りたつまい。こういう対立の図式は、ことばのもつ落し穴にまんまと引っかかっているとしか思えないのである。それは、実際に教えてみる場面を想像しさえすれば、誰にでもすぐ了解できるはずのものであろう。

金字塔の頂きを少し眺めただけで、探索はもう終りとしなければなるまい。これ以上深入りしては、帰るあてもないままに一日の行程も暮れてしまいそうである。行きずりの旅には、これ以上を期待しないほうがよい。今度くるときには、もっと周到な準備を整え、せめて適切な案内書くらいよんでおかねばなるまい。

（誰か、良いガイドブックを教えてくれるとよいのだが……）

手作りの道具では役立たないかもしれないが、最初にのべた感想を少し想いだして旅のよすがとしよう。自由題でかくということは、たぶん限定されたテーマを与えられるばあいより困難なことが多かろう。なぜ、難しいのか。この問題を考えることは、これまたたぶん自由保育を考える道に通じているのだろう。自ら、プロデューサーであり、作曲家でもあり、演奏家でもあり、そのうえ良きエンタテイナーでもありと、こんな覚悟が自由保育には必要ではないのだろうか。だが、それにたえられる人は、果して何人いるか。

◇◇人間性豊かな高嶺◇◇

「語りつぎいいつぎいかん」富士の高嶺は、古来、人々の畏れと憧れの対象であった。自然、自分の身辺にも、高嶺を求めたくなってくる。ときには、お国自慢の観なきにしも非ずであるが、「……富士」の類は「……銀座」とまではいかぬにしても、諸所方々にあるのは、少し旅をしてみればすぐ気づくことである。

ことばのわなというテーマから、連想はまた自然に美辞麗句の氾濫という問題に向っていく。このような方言を特に好む地域があるようにみえるからである。それは、教育界という世界である。

さる幼児教育の研究大会があった。主題は、「豊かな人間性を育てるために」といった類のものである。この大会に招かれて筆者は、はたととまどった。かくも壮大な目標をかかげて、いったい何をする積りなのだろうか。一日、二日、何かをきいたら、果して人間性を豊かにする秘宝が手に入るとでもいうのだろうか。

そういえば、私の知っている教育関係の研究大会には、何とこの種のスローガンが多いことか。いわく、「創造性を豊かに」、いわく、「思考力を育てる」、またいわく、「未来をひらく幼児教育」……。こうなると、富士の高嶺どころの話ではない。永井前文相の大好きな八ヶ岳という有様である。「連嶺の夢想よ、汝が白雪を消さずあれ」　こんなイメージを遺した詩人もあったっけ。懐しいかぎりではある。

誤解を受けそうだから、大急ぎでつけ加えておこう。私は、幼児教育界に限らず教育界一般のスローガン好きをただ冷やかしているわけではない。冷やかすというには、これは余りにも大きな問題なのだ。まともに教育を考える人間なら、誰しも、人間性豊かといった目標に反対しはすまい。それどころか、教育者たる者は、どんな些末にみえる教授場面にとりくんでいようと、どこかに理想的な人間像を目指し、これはそのための一つの手段、一つのステップと考えていないものはないであろう。（問題は、各教育者の夢想する理想像には、それぞれ隔りや、くいちがいがありそうだということだが、これについては論じない）

しかし、ここで、いま一度考えてみようではないか。私は洋服を作ります、というのを看板にしている洋服屋があるだろうか。医師は人命を助けるのが仕事です、などという医者がいたら、はてと眉につばをつけるほうが自然だろう。要するに、自明のことを恥ずかしげもなく高言するというのは、どこか慎しみを欠き、根本的に自覚を失っているふるまいだとしか私には思えない。

もっとも、今の世の中では、医は算術に堕落しかけている。だから、ことさら、医は仁術を強調しなければならないのだという意見もあろう。それはもっともである。そこから類推すれば、今の教育界は目標とすべき理想像を見失い、その故にこそ「人間性豊か」といったスローガンをことさら強調しなければならないのだということにもなるだろうが。

いずれにしろ、ほめられた話ではない。また、後者のようなら、これは内廻りの話だから、外に向って強調すべきではなく、むしろ、外部からの批判を待つべきことであろう。山高きが故

に、尊とからずである。厳しい自戒の気持こそ、必要ではなかろうか。

美辞麗句の氾濫は、なかみの貧しさをおおいかくす道具になっているのでなければ幸いである。富士の高嶺は、たしかに美しく偉大である。願わくば、そこに至る道も示されんことを。そうして、どのような目標に至る道も、足もとに目を注ぐかぎり、いずれも平凡無事で一見して素晴らしいなどということはないのだと、よくよく覚悟すべきであろう。野の百合の素朴さにひかれて道を辿るうちに、いつしか山頂に達するのこそ、――平凡人にとっては、ほんとうの理想であるのかもしれない。

◇◇◇遊びと勉強の峠◇◇◇

「富士には、月見草がよく似合う」。懐しの高嶺に別れを告げ、下ってくるのは峠道であり、そこには思いがけぬ花々の姿もみうけられよう。これから、一つそのような峠を通ってみよう。これもまた、ことばの問題といえばことばの問題だからである。

「勉強」ということばも、幼児教育界ではタブー語の一つであるらしい。反対に、「遊び」というのは、大変好ましいイメージを賦与されている。思うに、勉強は、すぐ小学校的とか知的とか、（幼児教育界にとっては）マイナスのイメージをよび起すからであろう。そこで、幼児の生活は遊びなのだということが強調され、はては何にでも、遊びという接尾辞がつけられる有様である。幼児の数遊び、ことば遊び、科学遊びの類は、枚挙に暇がない。まるで、遊びという呪文を唱えたとたんに、灰色の小悪魔も幸福の青い鳥に変身するといわんばかりの有様なのだ。

実をいうと、筆者自身も、「勉強」ということばは余り好きではない。いずれ中国起源のことばにはちがいないのだが、日本語に翻訳すれば、勉め強いる、とよめる。つまり、いやいやながら仕方なしにやる、強制されて努力する、そんなニュアンスがつきまとう。これに反し、遊びは、楽しくて自発的・主体的に行なう活動とみなされている。勉強と遊びとの勝敗は、これでは、昔から明らかだったといわねばなるまい。

しかし、私たちは、商人に「もう少し勉強しなさい」などとよくいう。こういう際の勉強と、勉学の意味での勉強と、同じことばをあててどうして平然としていられるのだろうか。

怠惰な筆者には、長いこと、この混同が疑問の種であった。ところが、たまたま、シューという中国系の学者の『比較文明社会論』という本をよむ機会があった。このなかで、彼は、日本人が

いかに中国語の意味をねじまげて使っているかといういくつかの例を引いており、そのなかに勉強ということばも入っていた。

何と、勉強とは、強制する、無理じいするというのが本来の意味だそうである。商人に「勉強しなさい」というほうが、実は原義であったのだ。それが、どうして、いつごろから、勉学の意味に転用されるようになったのだろうか。これは、筆者にとって新しい疑問の出発であり、ときどき怠惰な頭の片隅にふと浮かんでは消えない問題でもある。

ともあれ、強制が勉学の意味に転用されるとは、みごとな文化的誤訳の一例ではなかろうか。と同時に、このことばは、私たち日本人のもつ、古来からの勉学観の所在をよく物語っている。幼児教育界の「勉強」嫌いにも一理はあり、案外深い真相を直観的に洞察しているというべきだろうか。

しかし、それなら、勉強と対比的に定義されている「遊び」に対しても、ここで根本的な反省が必要なのではなかろうか。勉強とは、嫌々やるもの、強制されて仕方なしに行なう活動と頭から思いこんでいるからこそ、遊びに軍配が上がるのだ。しかし、この区別が妥当なものでないとすれば、まったく新しい展望が要求されるだろう。

遊びと勉強とを分ける峠からの眺めは、一方は誠に好ましく、他方は苦渋に満ちている。しかし、私には、この境界は、余りにも伝統的、余りにも人工的にみえるのだ。それは、私たち日本人の心の奥底に巣くっているただの幻ではなかろうか。しかも、この幻のために、今の日本の子どもが一つの不幸の極限に心ならずも到達しているとすれば、なおさらである。

私は、この峠を掘り崩さなければならぬと固く決心している。たとえ、そのために、自然破壊の汚名を着ようともである。

＝了＝

（お茶の水女子大学）